



縁をつむぐ国際協力

特定非営利活動法人 JIPPO (十方)

東日本大震災に被災されたすべてのみなさまに 心よりお見舞い申し上げます

東日本大震災とJIPPOの取り組み

中村 尚司(JIPPO 専務理事)

大震災の報に接して

大震災の直前に私は、ジャパン・プラットフォームの依頼でスリランカ緊急支援のモニタリングに出かけた。日本の巨大地震と大津波の報に接したのは、スリランカ洪水被災地支援の現場であった。被災者やNGO関係者からお見舞や追悼の言葉を聴き、CNNやBBCの報道番組を見て、その被害の大きさに驚いた。

京都に戻りJIPPOとして何ができるか、京都市幹部の知友、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターの大石課長などの意見を聴いた。予期通りJIPPO理事会でも東日本大震災に対する支援の必要性が重要な話題となった。自治体の関西広域連合では、京都府と福島県の連携を図ることになっているので、福島県における支援活動を模索することにした。

南相馬市に赴く

『日経メディカル』のブログに医師の色平哲郎氏が次のように書いている。「いま、南相馬市がく陸の孤島>になっている。地震に見舞われ、大津波に襲われ、行方不明者の捜索がやっと始まったところで、福島原発事故で<屋

内退避>を命じられている。援助物資は福島市に届いているのだけれど、南相馬市を<汚染地域>扱いにして、車で40分もかかるころまで<取りに来い>と言われている状況だった。風評被害がひどい。国は、南相馬市を見離さないでほしい」。私はこれを読んで週末に、地震、津波および原発事故の三重苦の下にある被災地を訪問しようと思い立った。

旧知の福島県建設事務所の二瓶宏孝さんが南相馬市民の避難所に詰めていると聴き、さっそく連絡を取る。東北新幹線は、那須塩原駅まで運行しているので、駅まで迎えに来てくれるという。さらに桜井市長との面談機会も設定し

てくれた。築地本願寺からも、山本政秀(東京教区教務所長)、菅原良成(本願寺宗務首都圏センター国内伝道推進部長)および森實隆(同主事)の三氏が支援物資を持って南相馬市まで来て下さることになった。

4月2日(土)の朝、8時半に出発し東京駅で東北新幹線に乗り換え、午後1時40分に現在の終着駅である那須塩原駅に着く。二瓶さんが迎えに来てくれ、国道4号線を北上する。運転席には、放射線の計測器が置いてある。郡山市内では、2マイクロシーベルト/時前後の放射線数値が表示されている。途中で道路の亀裂や屋根瓦の落ちた家を散見する。しか



津波に襲われた町の光景



し、阪神・淡路大震災に比べると、破壊の程度はいくぶん小さい。郡山駅東口のスーパーに行き、南相馬市秘書課から依頼のあったレトルト食品やジュースを買い車に積み込む。築地本願寺から駆け付ける山本教務所長などの車両とも連絡を取る。

二瓶さんの実家は、地震で柱が2本折れている。私が泊めてもらっているうちに全壊したら困ると思いつつながら、余震のたびにビクビクする。二瓶さんから今回の災害の特徴について話を聴くと、福島県浜通りの場合、宮城県と異なり、地震と津波に加えて、原発の放射性物質漏れが最大の課題である。現在のところ、南相馬市では放射線による被ばくはないが、原発の半径20キロ圏内、30キロ圏内、その圏外にまたがっているため、退避の実情が多様であり、見通しの立たない避難生活が住民を苦しめているとのことだった。

翌4月3日(日)の朝、4時半に起床する。気温は氷点下で寒い。郡山の日の出は、京都より30分くらい早い。二瓶さんが、おにぎりとおみそ汁の朝食を用意してくれる。午前8時に郡山駅東口で、築地本願寺から支援に駆けつけた山

本氏一行と合流する。飯舘村を経て南相馬市に着いたのは10時過ぎである。市役所は固い岩盤の上に建設されていて、震災による損傷はほとんどない。放射線の測定値も、1マイクロシーベルト/時以下で、郡山市や福島市より低い。東京からの救援物資を市役所の倉庫に降ろし、市長との面談予定の12時まで浄土真宗本願寺派の被災寺院を訪問した。

12時前に市役所に戻る。小柄で痩身の桜井勝延市長が、簡潔に現況を話してくれる。地震と津波による死者が、三月末現在で358名、行方不明が1140名もいる。約5000名の市民が市外に避難している。しかし、3月24日以降は自宅に戻る世帯も増えている。当面の区域外就学希望が、約700件出ている。郵便が届かない、金融機関が開かない、買い物も思うようにできない現状を改めて欲しいと要請しているようだ。

原発から20キロ以内では、遺体の捜索や収容も思うにまかせないのが、深刻な問題である。政府や東電は3月末まで、放射線量の計測も発表もしていないので、原発の風評被害が多い。多くの子どもたちが住んでいることを忘れて欲しくないという。

私はJIPPO理事会と大日本仏教慈善財団理事会における橘理事長の発言を引用しながら、京都で被災者の子どもや患者の受け入れに努力すると伝える。別れ際に「よく眠れない日が続くでしょう。でも、先が長いので休養をとってください」と声をか

けた。「私はマラソン・ランナーですから、持久力があります」という返事が印象的だった。

JIPPOの支援事業案

「災害救援・復興」は、JIPPOの目的の重要な柱である。当面は、龍谷大学や築地本願寺と協力して、支援物資やボランティアを送るべきであろう。しかし、原子力発電所からの放射性物質漏れが長引くようであれば、土壌汚染に風評被害も加わり、農業生産に従事する道が断たれる。もっと中・長期的な支援策が望まれる。退避所の設営や移住地の準備も考えなければならぬ。戦時中の学童疎開の経験を活かして、今回の大震災で親を亡くした子どもたちの受け入れも取り組むべきであろう。近年、京都市に編入された旧京北町には、過疎化や高齢化により耕作放棄された農地も少なくない。そのような地区に移住地を求め、廃校した校舎を復旧し、活用することも可能であろう。このような事業の推進には、京都市だけでも教育委員会、農業事務所、住宅局など関連部局との調整が必要である。

もし実現すれば、耕種農業だけでなく果樹、畜産、内水面漁業、林産物や農産物の加工業などの展開へと夢が広がる。相馬の伝統文化と京都文化が交流する貴重な機会ともなろう。JIPPOがこのような企画を推進するのは、非常に有意義な社会的貢献であろう。



南相馬市長(中央奥)らとの会談



1月27日、28日の2日間、JIPPOの会員8名がミャンマーのシュエ・ジン寺子屋を訪れました。ここはJIPPOが過去3回にわたり文房具や給食のための助成金を支援してきた寺子屋です。ただ物資を送るだけでなく、現地の人々とふれあいたいとの願いから企画したツアーですが、「大切な心の在り方」をミャンマーの人々から教えられた旅でした。

「ミャンマー寺子屋給食ツアー」実施報告

ミャンマーの寺子屋

ミャンマーは国民の9割が仏教徒といわれ、全国には僧侶が子どもたちに基本的な読み書きを教える寺子屋が数多くあります。正規の学校教育機関として政府に認められており、公立学校のような制服があるわけではなく、学用品もお寺が揃えるので費用が掛からず、経済的に恵まれない多くの子どもたちが学んでいます。

寺子屋は人々のお坊さんへのお布施やお寺への寄付で運営されています。JIPPOは2009年度、末本喜久次理事がミャンマーを視察したのをきっかけにシュエ・ジン寺子屋へ延べ80万円の助成金を送り、約450人の児童・生徒の学用品や2か月間の給食費に

使われました。

今回の交流はミャンマーの寺子屋支援事業をしている「NPO法人メコン総合研究所」にコーディネートしてもらいました。現地スタッフのトゥエ・ウーさんは礼儀正しく優しい笑顔が印象的な女性でした。「国内にはサイクロンで孤児となり寺子屋に身を寄せている子どもたちも多くいます。



シュエ・ジン寺子屋で子どもたちに挨拶する参加者

撮影／幡谷康明氏

そうした子どもは笑顔が見られず胸が詰まります」と悲しい現状も話していました。

ミャンマー給食ツアー旅程

日付	内容
1/26(水)	空路ヤンゴンへ。
1/27(木)	午前、参加者で交流の打ち合わせ 午後、寺子屋訪問、交流準備
1/28(金)	寺子屋での交流
1/29(土)	バガン 仏教遺跡群参拝
1/30(日)	ヤンゴン 市内散策
1/31(月)	関西空港 帰国

ミャンマー寺子屋給食ツアー報告

JIPPO常任理事 末本喜久次

定通り、前日から準備したチキンカレーを子どもたちと一緒に食し、また日本から持参した絵本の読み聞かせや折り紙作りを通して子どもたちと触れ合うことができました。そのほか仏教遺跡群エ・ジン寺子屋の子どもたちに食事を提供して、一パゴダ(仏塔)が林立する光景と、そこに住む人びとの営みに出会って、仏教と生活の結びつきに思いを向けることができました。



主な出来事

*27日／午前中、オリエンテーションを行い、子どもたちとの交流会(約40分程度)で実施する「折り紙」の講習や、絵本を読む担当者を決めたりした。子どもたちに思いを馳せて、皆、熱心に検討していた。午後は食事準備のための包丁や、まな板、それに折り紙作りのためのクレヨンや糊等を購入し、シュエ・ジン寺子屋へ。ご住職や地元の協力者らの出迎えを受ける。住職に話を伺って6月から児童が約150人増加するので、校舎が手狭になることや、食事の提供の調達も大変だということなどを聞く。子どもたちの健康面においては特に問題はないとのこと。また教員の話では、通常6万チャット(日本円で6600円)の月給が、ここでは2万チャットの報酬とすることを知る。その後カレーの準備を行う。私たちはじゃがいもの皮むき、小切り、たまねぎの小切りなどを行う。地元の女性らも翌日の準備を始めていた。

*28日／シュエ・ジン寺子屋に朝8時過ぎに到着。9時からの礼拝に参列する。子どもたちは三帰



絵本「笠地蔵」の読み聞かせのようす

依をはじめ経文を暗誦し、礼拝を繰り返した。30分も礼拝するのは寺子屋ならではの、貧困家庭でなくてもこうした仏教を身につけさせるために子どもを寺の学校に通わせている親もいるという。礼

儀・作法や年長者を敬う心が養われていると感じさせてくれた。

9時半になったが給食のカレーがまだできておらず、絵本を読むことになる。『かさじぞう』を参加者が日本語で読み、ガイドさんがミャンマー語に訳して語り聞かせたが、400人以上の子どもが一所に集まったのでざわざわしてしまっただけで先生も注意するが世界中どこでも子どもは子どもなのだ。ともあれ興味を覚えた子は大勢いた。カレーが出来上がり、二班に分かれていただいた。子どもたちは礼拝のことばを述べたあと自分のお皿にあるカレーを黙々と食べる。あまり表情がないので、おいしいか?と訊ねると、「うん」とはにかみながら答えてくれた。食事はグルメリ以前の存在なのだと思った。終わると、隣りの子どもがさっと自分のと私のお皿を洗い場へ持って行ってくれた。何気ない行為に感心させられた。二班に分かれたもう一方では折り紙作りをしていた。子どもたちは夢中で折っていたが、一人一人進み方も違うの



給食にチキンカレーを皆でいただく

でまとめるのは大変だった。国鳥の孔雀を折って名前などを描いて、壁紙に貼り付けた。記念になったら幸いだ。

*29日／ミャンマー中部の遺跡都市・バガンへ。午前中は市民の台所であるニャンウー・マーケットや代表的な仏塔・寺院などを巡り、夕方からもアーナンダ寺院など3カ寺や日本人戦没者慰霊碑などに参拝するが、最後のシュエサンドーパゴダ(仏塔)から眺めた夕陽はすばらしかった。ただ、観光客が集まる場所では、子どもたちが絵ハガキや小物等の土産物売るために、寄ってくる。参加者の一人が言うには、寄って来た少女は13歳で、学校には行っておらず、生活のためにこうして毎日、みやげ物売っているのだということだった。観光地の現実が、子どもたちから思い知らされた。

人びとの生活の核として機能しているミャンマーのお寺を通して、より多くの子供たちに、心豊かな教育を受けてもらうために、ささやかながら、私たちが支援できることを支援していきたいと思う。



ミャンマー給食ツアーに学ぶ

神奈川県 松林蓉子

このたびJIPPO主催のミャンマーツアーに参加いたしました。貧困家庭の子どもが学ぶヤンゴン郊外タンリン町のシュエ・ジン寺子屋で、住職を表敬し、学び舎に集う現地の子もたちとの交流を図る目的でした。住民たちと協力して食事の支度をし、子どもたちと一緒にいただくことです。食を共にすることで、人と人との触れ合いと共感を得ることができるのです。もう少し内容を詳しく紹介しましょう。日本から持参したカレールーで約500人分の昼食準備のお手伝いをする事、もう一つは食事を共にすることでした。この前後の空き時間を利用して、日本の童話を読んで聴いていただいたり、簡単な鳥や飛行機を、色紙で折る方法を教えました。前者の絵本を見せたり、ミャンマー語で通訳されるお話には、意味が理解しがたいのか？集中力が持続できないようです。後者の折り紙作業には、パニック状態になるほどエキサイトしました。

考えてみますと、食べることや何かを作ることは、言葉を交わさなくても「心」が通い合うといえます。ひととき、さわやかな時を過ごすことができました。こうしたささやかな援助法にもそれなりに目に見えない効果が生まれると思います。試行錯誤を繰り返しながらも、その改善を行い、活動を向上発展させたいものです。

現在、JIPPOの活動は社会一般での認識は浅く、順調と言えないかもしれません。しかし、いつでもどこでも、だれにでも出来る「共に生きる」「分かち合う心」は、言い換えれば仏陀の教える実践行です。このことが、ごく当たり前のこととなる日を目ざして、運動の大きな輪が広がっていくことを念じます。「JIPPO」はその一滴を投じているのです。

余談ながら、当ミャンマーツアー行程においてヤンゴンのシュエダゴンパゴダやバガンの仏塔遺跡を参拝し、私たちがつい忘れがちな心の豊かな暮らしを観たことでした。



シュエダゴン・パゴダ

撮影／幡谷康明氏

美しい夕陽の国へ

—仏教国ミャンマーで感じたこと—

奈良県 和氣聖子

百聞は一見に如かずというけれど、ミャンマーに関しては百聞がないままに出発しました。「行って大丈夫？無事に帰って来てね」と何人かに言われ、「大丈夫」と思いつつも不安なまま降り立ったヤンゴン空港。流暢な日本語と笑顔で出迎えてくれたガイドのミヤーさん

んに一安心でした。

第一日目、ミーティングを終えて、まな板や包丁等を買いにスーパーへ向かいました。その入り口でのボディチェックにはびっくり。そして初めての買い物でドルを支払って、返されたおつりの紙幣を見て絶句でした。なぜって、みたこともないよれよれの紙でいくらなのか数字も見えないほどの汚れよう、それが初めて手にしたミャンマーの通貨チャットでした。

いよいよ目的地シュエ・ジン寺子屋へ。途中すれ違う京都市バスや阪急バス、そして名鉄バスも。日本で使われなくなったバスが、ここでまた命を吹き返している不思議。それにしても、揺れること。ヤンゴン郊外のメイン道路は舗装されているけれど、両脇にある村々はほとんどが地道で土埃が舞っていました。

たどり着いた寺子屋、「ミンガラバ」と合掌して誰かが挨拶しています。耳慣れないその言葉は「こんにちは」だと教えられました。子どもたちの顔には白い塗りもの。「タナカ」といって木を擦って水をつけて顔に付けるとひんやりするらしい。その効果は虫よけとおしゃれにもなるという。にっこりと笑う子どもたち、その瞳の輝いていること。寺院では誰もが裸足になって、内部に入るのがこの国のマナー。笑顔で迎えてくださったご住職、そしてスタッフの人々。正面に安置されている仏さまに合掌礼拝。ああ、ここまで来させていただいたんだなあと感激しました。



大きな鍋でカレーを調理

ツアーに参加して

大阪府 幡谷康明

ミャンマーの子どもたちとの
出会い

富山県 雪山玲子

全く何の問題意識もないままに、末本君が関わっているから、というだけで下調べもせず、私はカメラマンなので記録係のつもりで参加させていただきました。手当たり次第に撮影していたので撮っているときには気付かなかったのですが、じっくり見てみると一番印象的なのは子どもたちの目です。カッと見開いた目がみんなキラキラしているのです。そして感心したのが、子どもたちが私の前を横切るとき、腕を抱えて身体をかがめて通り過ぎるのです。目上の人に対する礼儀なのでしょう。仏教の教えが根底にあるような気がしました。そして圧巻だったのが朝のお勤めでした。一糸乱れぬ読経の大合唱には本当に感動しました。一番の傑作はシュエ・ジン寺子屋から帰るとき、高木さんが素足のままでバスに乗って、大分経ってから気づいたということです。アンピリーバポーでした。

持ってきた日本製のルーを使ったカレーの準備。目に涙をためタマネギを切り、包丁でジャガイモの皮をもくもく剥ぎました。五百人分全部はとて私たちだけでは無理です。後は現地の人たちがほとんど引き受けてくださった。あれだけの材料をまとめてどうして鍋に入れそして混ぜるのか、そこではスコップというものが役に立っていました。翌朝、寺子屋へ子どもたちが集まってきます。礼拝では皆で声をそろえてお経を称えるんです。「ミャンマーではお経は一つです」とガイドのチャーさん。幼い頃にこうして毎朝みんなと一緒に称えたお経は一生忘れない。それが人生の礎を学び、一生を支える大きな道しるべとなっているように思えます。

共にみ仏さまを仰ぎ生かされている者として、子どもたちの美しい瞳、人々のやさしさや笑顔、そして寺院で礼拝する人々の姿にたくさんのお話を教えられました。そして、あの美しいバガンのパゴダ群に落ちる夕陽は今も瞳に焼き付いて忘れられないもの。多くを学ばせて頂いた貴重なご縁にようこそ感謝です。

今回参加することができて大変良かったです。給食の手伝いもできたし、バガンでたくさんパゴダの中に沈む夕陽も撮影できましたし、満足しております。本当にありがとうございます。

思いがけないご縁で参加させていただきました。お恥ずかしながら先ず調べたのが世界地図です。寺子屋に集まる子どもたちに会えるというのは大きな魅力でしたしこんなご縁はめったにないという思いもありました。同じアジアとはいえ南国です。空気も匂いも違います。

ヤンゴンからバスでタンリン町にあるシュエ・ジン寺院を訪れました。おずおずと遠巻きで我々を眺めている子どもたちに「ミンガラバ」覚えてたの言葉であいさつすると「ミンガラバ」と恥ずかしそうに人なつっこい控えめな笑顔で答えてくれました。「タナカ」という木の粉をおしろいのように顔に塗っています。この日はご住職にご挨拶をしてから食材を刻んで翌日の準備をしました子どもたちはその様子を遠巻きに眺めていました。



バガンの仏塔群に沈む夕日

撮影／幡谷康明氏



翌日、遊ぶための折り紙などを
持って再びお寺へ。礼拝堂は砂
埃のコンクリート、そこへ子ども
たちが続々と集まってきます。250人
近い子どもたちが二人の先生の
言うことをよく聞いています。日本
の子どもたちなら「えーっ、こんな
ところに座るのー？」と不平不満
を言うだろうと思いながら一緒に
座りました。9時、ご住職の短いお
話しの後お勤めが始まります。ま
ずその声の大きさにドキッとしま
した。全員がおなかから声を出して
それは大きな声なのです。30分
続きました。合掌して懸命に声を出
してお勤めする子どもたち…。
この子たちに会えてよかった…。



朝のお勤め 撮影／幡谷康明氏

後から聞いたのですが、お勤めの
内容は釈尊の五戒。「生き物を殺
してはいけません。嘘をついては
いけません…』毎朝お勤めしてい
たらお釈迦様の御心が染み込ん
でいくでしょう。

その後は給食です。アルミのお
皿一枚にスプーンだけ。コップは
ありません。建物の隣に大きな水
タンクがあり子どもたちは時々飲
んでいました。普段は豆スープだ

そうです。私たちが用意したチキ
ンカレーはご馳走です。先生たち
がごはんのおかわりをどさどさ
と入れていました。中にはチキン
を残している子もいて、ごくまれに
食べるチキンカレーは果たして子
どもたちの喜びになるのだろうか
と少々不安でした。後日お寺の劇
団の子どもたちに話すと「たとえ1
回でもうれしいと思うよ」と言っ
てくれてほっとしましたが、何かをさせ
てもらふことの難しさを感じます。
はしゃぎまわる子どもたちをしかり
つけている先生を眺めながら、子
どもたちや先生やご住職が本当
に望み喜ばれることはなんだろう
かと考えさせられました。

ご住職とお会いした折に地域の
の方々にもお会いしましたが、在
日生活もされた男性がご自分の
誕生日に何かできることはないか
とご住職に相談に来ておいでで
した。自分の誕生日に人にプレゼン
トをする…それも相手が望むこと
をさせてもらう…なんて素敵でし
ょう。と感動していたらアジア
ではよくあることだと聞いてさら
に感動。文明の進んだ豊かな日本
ではどうなのでしょう。大切なこ
とを教わって真似をしなければと
思ったことです。

ツアーに参加して

富山県 林敬子

タイのバンコックから、飛行機で
ほんの1時間余り、比較的楽な旅
程であった。たった5日間の旅で
あったが、ミャンマーはやさしい印
象の国であった。

貧しい子どもたちのために寺
子屋を開いているお坊さん、又、
そこで、働く若い先生たち。子ども
たちには厳しい彼女たちであった
が喜んで仕事をしていた。彼女た
ちの考えは、人の役立つことをし
て徳を積むことである。人生で大
切なことは、徳を積む事である。
お金は関係ないのである。良い人
生を送るために徳を積んでおくの
だと、彼女たちは言っていた。

お寺はお参りの人で、常に混雑
している。仏教が国民に深く根付
いており、まるでどこかへ遊びに
行くように気楽にお寺参りをして
いる。寺子屋で働く人々は皆、仏
さまのようにやさしく、奉仕の心
が溢れているように感じた。

スーチーさんの事で軍事政権に
対して先入観があったのだろう。
人々が普通に暮らしていることに
違和感さえ持った。スーチーさん
の家は、街の湖の反対側、ブー
ゲンビリアが揺れる湖畔にあっ
た。彼女は対岸の自由に行き交
う若者を見て、希望を見出して
いただろうと、デートコースだ
という道を歩きながら思った。
スーチーさんという言葉は発せ
ないほうがよいと言われていた
5日間はやっばり、どことなく窮
屈であった。

もう一つ気になる事があった。
それは、小さな子どもたちが学
校へ行かないで、絵はがき等を
売っている姿である。しかし、
今回のツアーでミャンマーの
為に頑張っている若い人た
ちにも会うことができ、希望
を持った。

ミャンマーツアーに同行して
JIPPO事務局 高木美智代

この交流で私は足るを知る心、物やお金ではない喜びをシュエ・ジンの人々から深く意識づけられました。

ご住職は私たちを受け入れるのみで求めることはなく、若い先生たちは「寺子屋で働くことはお金ではなく喜びなのです」と穏やかな瞳を向け、子どもたちの中に余分に折り紙を持っていこうとする子は一人もいませんでした。

彼らが日常の姿から私たちに教えたように、私たち日本人もその振る舞いから外国の人々の尊敬を得ることができるようになりたいです。価値観の押し付けやお金や物で尊敬を得ることは決して出来ないということを肝に銘じながらこれからの活動を考えていきたいと思います。

今回私が大変敬服したのは参加者のみなさんの自己管理や団体行動への心配りでした。またミャンマー人ガイドのミャーさんは豊かな経験と細部にわたる配慮、専門的な知識で私たちを案内してくれました。旅行会社、現地NPOをはじめ、関わってくださった全てのみなさんのおかげで無事過ごせ、感謝の一言です。

JIPPO インフォメーション

東日本大震災の被災者救援金募集

東日本大震災復興に向け、救援金を募集しています

募金の名称：「東日本大震災の被災者救援金」
受付口座番号：郵便振替
口座記号番号：00980-4-321233
加入者名：特定非営利活動法人JIPPO
※ 通信欄に「東日本大震災」とご記入ください。
募集期間：2011年3月13日から2011年5月31日

※JIPPOは5月に一度募集を締め切り、その時点で必要とされる団体を選定して、支援します。大手の募金の届かない草の根の活動を支援したいと考えています。ぜひ皆さまのご協力をお願いします。

親鸞聖人750回大遠忌

JIPPO活動紹介パネル展示とフェアトレード販売

日時：2011年4月9日(土)～2012年1月16日(月)
場所：聞法会館1階大広間(総会所)にてパネル展、
門前町エリアテーマ館(伝道院)前にてフェアトレードの紅茶、コーヒーの販売を行います。

※ 7、8、12月を除く、毎月9日から16日の法要期間、フェアトレードの販売をお手伝いしていただくボランティアを募集しています。詳細はJIPPO事務局へお問い合わせください。

4月の野宿者支援

4月21日(木)、22日(金)の2日間、京都市内の山科川、東西高瀬川を巡回します。

2011年御正忌報恩講バザーの報告

2011年1月9日、10日、14日、15日の4日間、第二回目の「JIPPOバザー」を開きました。会員のみなさまからたくさんのお品物をご提供いただき、盛大に行うことができました。天候にも恵まれ、おかげさまで383,315円の売り上げとなりました。

バザーの売上金はJIPPO事業の一つである「野宿者支援」のために使わせていただきます。皆様のご協力に心からお礼申し上げます。

2011年度総会の予定

2011年度定期総会を6月に開きます。
正会員、学生会員の皆さまのご出席をお願いします。

～事務局だより～

4月1日発行に向けてもう少しで編集が終わると作業を進めていた矢先の東北沖の地震と津波、そして原発の事故。JIPPOとしても一刻も早く現地の支援活動を始めたいと逸る心を抑え、長期戦になるであろう復興に長く関わっていく考えです。5号は内容を急ぎ一部変更したため発行日が遅れましたこととお詫びします。(た)

JIPPO会報第5号 (2011年4月15日発行)
発行：特定非営利活動法人 JIPPO
〒600-8501 京都府京都市下京区堀川通花屋町下ル
本願寺門前町本願寺内
TEL：075-371-5210
FAX：075-371-5240
e-mail：office@jippo.or.jp
URL：http://jippo.or.jp